

小島政二郎

長篇小説

芥川龍之介

読売新聞社

長篇小説

芥川龍之介

小島政二郎

読売新聞社

芥川龍之介

(長篇小説)

昭和五十二年十一月十五日 第一刷
昭和五十三年二月十五日 第三刷

著者 小島政二郎

編集人 笠井晴信

発行人 深見和夫

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 一〇〇

大阪市北区野崎町七七 一五三〇

北九州市小倉北区明和町一の二 一八〇二

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

定価 九八〇円

装丁 田 奨
撮影 中尾たかし

©, Masajirō Kojima
0093-702330-8715

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

芥川龍之介
(長篇小説)

明治の頃は、四十二の女の人が妊娠して子供を生んだ場合、親類の人と打ち合わせて置いて、その家の前へ捨て子にしたものだそうだ。それを、その家の人が拾って、暫く養って養子にやる形で実の父母の許に返してやる。

そういう風習があった。私の叔母なども四十二で初産の時、女の子を生んで

「夜コッソリお前の家の前へ捨てに行つて、お前のおッ母さんに拾つて貰つたもんだよ」

そんな話をしていた。

「なぜそんなバカな真似をしたんです」

「だって、四十二にもなつて、赤ん坊を生むなんてキマリが悪いじゃないか」

「だって、キマリの悪い子を生んで育てていりゃ、キマリの悪い点じゃ同じことじゃありませんか」

「だから、養子として改めて貰うのさ」

「なるほど、世間体^{てい}を憚^{はば}るだけのことですか」

今の人なら、何だ、世間体なんかと云うだろうが、その頃は夫婦で揃って家を出ることすら、絶対に世間が許さなかった。まず一時間ぐらい前に夫が家を出る。細君はそれから一時間程遅れて家を出て、町内の人の目の届かないところで落ち合つて、それから揃ってどこかへ行くのが一般の作法だった。私の両親なんか、一生この世間体を憚る作法を守っていた。

だから、谷崎潤一郎の奥さんの妹のおせい洋装で私を訪ねて来た時など、町内じゅうが騒然として目を^{そば}くたしたものだ。沉^いんや、二人が肩を並べて彼女主演のシネマを見に出掛けるのを見た時など

「オイ、見たか。柳河屋^{やながわや}の息子のところへ、合の子の嫁さんが来るらしいぜ」

そんな噂が立ったものだ。事実、彼女はそんな容貌と化粧をしていた。

そんな時代だった。嘘か本当か知らないが、芥川さんも、お母さんが四十二の時の子で、生まれると同時に、芥川家の家の前へ捨てられたのだと云う噂が伝えられていた。

このことを、私自身芥川さんに確かめたこともなければ、調べたこともないから、真偽の程は分らない。しかし、芥川さんは新原敏三の長男だし、そんな事でもなかったら、芥川家の養子になる筈がない。そう私は考えていた。芥川さんのお父さんは、芥川道章^{みちあき}と云って、若い頃東京市の土木局長まで勤めた人だそうだ。

余計なことだが、樋口一葉のお父さんとも同僚で知っていると私に話されたことがあった。

この道章の妹（フク）が、芥川さんの実父と云われている新原敏三の妻である。フクは芥川さんの姉さんのひさと、弟の得二とを生んで、明治三十五年に死んだ。このフクについては、芥川さんの自殺と深い関係があるから忘れないでいて貰いたい。

芥川さんは明治二十五年の三月一日に生まれた。辰年の、辰の月の、辰の日の由。それで龍之介と名付けられた。

私は芥川さんの一生を、悲劇の一生だと思っている。

世俗に「小糠三合持ったら養子に行くな」と云われている。私も古賀の家に生まれて、小島家に養子に行ったものだ。しかし、小島家は、私の祖父が小島家の一人娘に惚れて、無理やりに嫁にしたために小島家の跡が絶えてしまった。で、養子にやられたのだが、幸い両親の手許で外の兄弟と一緒に育てられた。独立してからも、遠慮しなければならぬ誰もいなかった。だから名前こそ養子だが、養子的な束縛は勿論、誰に遠慮する必要もなかった。

しかし、芥川さんの場合は違う。両親の外に、一生嫁に行かなかったフキという伯母さんがいた。

私が鈴木三重吉の紹介状を持って芥川家へ遊びに行ったのは、田端たばたの我鬼窟がきくつだった。その頃、東

京は十五区で、田端は市外、北豊島郡滝野川町田端四三五だった。静かな、高級住宅が並んでいた。

門を明けると、広い前庭があつて、突き当りに下町風の格子戸があり、そこに「忙中謝客^{ばうちゅうしやかく}」と書いた札がブラ下がつていた。あとで知ったのだが、文子さんがお嫁に來た翌日だった。しかし、新婚草^{そうそう}々の雰囲気なんかこれっぽっちもなかった。

いろんな客が出たり入ったりしたが、未だにハッキリ覚えているのは、新潮社の中根駒十郎の姿だった。社長の佐藤義亮の妹を貰つて、専ら出版の交渉に當つていた。芥川さんは既に「羅生門」をアルスから出版して、若手の流行作家の一人だった。私は訪問する前に、「或日の大石内蔵助」を「中央公論」で読んでいた。

日曜日が芥川さんの面会日だった。芥川さんも下町生まれ、私も下町生まれだったから、話をしても、有無相通^{うむあひとほ}じるものがあつて、すぐ親しくなれた。度々遊びに行っている間に、奥さんとも親しくなれ、御両親とも、伯母さんとも挨拶するようになったが、お父さんは小柄の方だったが、腰の据わつた方で、ちつとやそつとで自分の生活態度を見せるような方ではなかった。

お母さんも、柔和な愛想のよい、小柄な、いかにも下町の古い家の主婦で一生を通して來たといつたような当りのいゝ方だったが、御主人同様、長い間極まつた芥川家の生活様式を、どんな事が

あつても、曲げたり崩したりすることは、いざとなつたら一步も^{かしやく}仮借しない型が既に出来ていた方であつた。お年寄だから当り前のことであつた。ただ下町の方だから、お二人とも人を^そ逸らさない、いつ逢つてもにこやかな態度を崩したりはしなかつた。

私の感じを云うと、私の両親を見るような、私の家のような質素な暮らしを持っている雰囲氣だつた。大きな二階家で、その頃の常識から云うと、小説家の住めるような貧弱な家ではなかつた。

その頃の小説家の住まいと云えば、自分の家を持っていたのは、森鷗外と、有島武郎ぐらいのもので、両家とも立派な家だつた。鷗外は陸軍軍医総監だつたし、有島は実業家の父の邸宅だつた。

田山花袋も、その頃郊外の代々木の奥に自宅を持っていたが、小説ばかりでなしに、博文館の社員だつた。

あとは夏目漱石でも借家、島崎藤村も、徳田秋声も借家、小説家と聞くと、誰も家を貸してくれなかつた時代だつた。泉鏡花は二軒^{むねわ}続きの棟割長屋に一生住んでいた。

だから、立派な芥川家の二階の書齋に通された時は正直ビツクリした。八畳の部屋の真中に長火鉢があつて、紫檀の、漱石から贈られた小振りの机の上には、瀬戸の硯屏^{いんびょう}があつて、古風な茶筴^{ちやん}と云うペン皿が揃つてい、部屋の到る所に英書、漢籍、日本の新刊書が大きな書棚に綺麗に並んでいる外に、西洋の画集やいろ／＼の本が畳の上に散らばっていた。彼の坐っているうしろに小さな棚

があつて、骨董が一つ飾られていた。

伯母さんのことを云い忘れたが、このフキという伯母さんは、やっぱり中背の人だったが、比較的顔が大きく、中高の、いかにも個性的な強い表情をしていた。片方の目が、若い時兄の道章と喧嘩をして——と云うよりも何か大變兄に腹を立てさせるようなことをして、イキナリ鉛筆で突つかれて片目が潰れてしまったのだと聞いた。それが全く片目だけになった人のように見え、ちよいと見ると、片方の目が不自由な感じを与えるような不思議な目をしていた。

それだけに、ちよいと意地悪な感じがした。お母さん程愛想はよくなかったが、それでも多少取ッ付きにくくはあつたが、不愛想と云う程のことはなかった。お母さんは、よく冗談を云って私達を笑わせてくれたが、伯母さんはそんな事はなかった。いつも平凡帳面^{ひらちようめん}で、言葉数も少く、まあ、真面目一方と云つた方だった。目のせいだろう。少し恐い感じがした。当時六十歳前後だつたらう。

二

こういうキチンと出来上つた家風の家へ、跡見女学校を卒業したばかりのお嬢さんがお嫁に來た

のだ。文子さんは、云わば山の手の生まれで、海軍将校のお嬢さんだった。確か初瀬^{はつせ}と云う戦艦の艦長で、旅順港で沈没した時、艦と共に戦死したと聞いていた。文子さんの兄さんと芥川さんとが同級生で仲がよかったのが縁で、大正五年に結納の取り交わをした上で、卒業した大正七年に結婚をした。恐らく十八か十九の若さだったろう。芥川は明治二十五年生まれだから、二十九だった。芥川は瘦せて十二三貫しかなかったが、奥さんは十五六貫あった。

文子さんがお嫁に來た翌の日、外に出たついでに夫のために黄水仙の鉢植えを一ト鉢買って來たら、忽ち

「お嫁に來る草々、無駄使いをしては困る」

と芥川から小言を云われた。新婚草々の花嫁が愛する夫のために花を買って來た嬉しさの分らない芥川でないことは云うまでもあるまい。伯母が云えと云って云わせた小言であることは文子にも分った。

彼女は驚いたことだろう。私の女房だったら、翌日すぐに家を飛び出そうと思ったに違いない。私が新婚二日目に訪れて、どこにも新婚らしい雰囲気を感じなかったのも分るだろう。

また芥川が自分の新著にサインをして、彼女の弟塚本八洲^{やしま}に送本するように云い付けた。で、イソ／＼と小包にして、郵便局へ持って行って帰って來たら、早速伯母に呼ばれて、

「何かする時は、一応私に断わりを云ってからするように——」

そう云って窘められた。この時も、文子さんはビツクリして悲しかっただろう。こんな新婚生活ツてあるだろうか。

要するに、金銭の出入りは父親と伯母とで処理していた。殊に、父は銀行に関係したことがあるので、簿記をよくし、経理に明るく、男のくせに家計簿を付けていた。そうして嫁の教育は、伯母が一任されていたらしい。だから、芥川自身も、

「文子は俺の女房ではなくって、芥川家の嫁だ」と云っていた。

芥川はその頃、横須賀の海軍機関学校の教官を勤めていた。私のところにある彼の履歴書を見ると、

「大正五年十二月海軍機関学校英語教授を嘱託せられる」

と書いてある。東京から横須賀までは通い切れないので、結婚後早速鎌倉に二人で新家庭を持った。

大町辻と云うところで、横須賀線の汽車が鎌倉を出て間もなくのところに、大きな別荘があった。その庭の一部分に離れのような独立した家屋があり、木々でお母屋との間を隔離されていた。

庭に池があつて、芭蕉が大きな葉を拵げていた。

「私の一生で、一番楽しかったのは、この鎌倉生活の一年間でした」

奥さんは、いつも私にそう云つて懐かしがっていた。もっと二人きりの生活を続けていたかつたと云つていた。伯母さんなしの、両親なしの、自由な新婚生活は彼女はこの一年間しか味わなかつたのだ、一生――

それは文子さんばかりではなかつたらう。芥川さんにとつても、一生一度の楽しい新婚生活だつたらう。

久米正雄が失恋して、何にも書けなくなり、生活に困っているのを見兼ねて、時事新報の記者だった菊池寛が、「時事」に「螢草」はたらくさという大衆小説を書かせて大受けに受けている時だった。

彼は今の駿河銀行のうしろあたりにあつた讃岐屋とか云う安い下宿のような旅館に籠つて、毎日一回分ずつ書いて名声を博しつゝあつた。

菊池寛はまだ出世作を書いていず、一番文壇にデビューするのが遅れていた。が、東京に一人いるのが寂しいので、時々鎌倉へ遊びに来た。

久米は「螢草」で大衆小説を書いた外に、「競漕」や「父の死」や「受験生の手記」を書いて新進作家として認められてもいた。

芥川も「鼻」や「羅生門」を書いて漱石に認められ——漱石は「今昔物語」を読んでいなかった
ので、「今昔物語」から取材した「芋粥」のような作品が珍らしかったのだろう。好意ある手紙を
久米と二人宛によこして、

「君達は人を押しては駄目だ。牛を押さなければ——」

と云ったようなことを書いて激励してくれた。

右の三人が、鎌倉で落ち合って、文学を談じている風景は、野心に燃えていた、私のような文学
青年には羨望の的^{まじ}だった。

恐らく芥川の一生のうちで、最も自信に満ちて創作にいそんでいた時代だったろう。久米正雄
もそうだったろう。佐藤春夫が「田園の憂鬱」や「お絹とその兄弟」で文壇に登場したのも、その
頃だったろう。

一人遅れていた菊池寛も、或日湯島天神の境内で、手相見に偶然手相を見て貰ったら、

「あなたの将来は非常な幸運に恵まれている」

と云われて、小指の隣の薬指に太閤秀吉と同じ手相が現われていると指摘された。しかし、彼は
信じなかった。現在一介の新聞記者であり、その方面で立身出世する望みはなし、文学者としても
一流の才能があるとは思えなかったし、何を云うかと思って忘れるでもなく忘れていた。忘れなが

らも、微かに覚えていた。

「身投救助業」とか「ゼラール中尉」とか「勲章を貰う話」とか云う面白い小説を書いていたが、一向に認められずにいた。そのうち、夕方彼が露地の中の貧弱な貸家へ帰って見ると、露地の入口に一台の人力車が留まっていた。

その人力車は、その頃文壇で有名な「滝田の人力車」と云われていた人力車だった。「中央公論」の編輯長で、滝田樗陰しゅういんという有名な編輯者がいた。この人に認められれば、文壇で一流の作者になれるとまで云われていた。

室生犀星も、滝田に面会を申し込む勇気がなく、「幼年時代」の原稿を滝田の私宅の玄関に放り込んで認められて、「性に目覚める頃」を書いて文壇に出て行った。村松梢風しょうふうも、同じ手段で初めて原稿が売れるようになった。谷崎潤一郎も、佐藤春夫も、滝田によって認められたのが出世の始まりだった。

後に「改造」が出て、「中央公論」の強力な競争雑誌になり、今までどこでもしなかった、傑作や力作を書くと、「改造」だけは褒美の金一封をくれた。それまでいゝ作を書く有名な作家を一人占めに使っていた「中央公論」から、そういう手段で「改造」の方へも寄稿して貰うようにした。「改造」は「中央公論」では出来なかった社会主義の論文を載せて、新時代の読者を獲得して行った。

「中央公論」の論文は、吉野作造の民主主義までで、社会主義の論文は掲載する勇気がなかった。「民主主義」とも云えずに、「民本主義」と云うような文字を使っていた時代だった。

それでも「中央公論」はよく売れた。私なども、載る小説が面白いので買っていた。よく売れるので、滝田は「中央公論」の売り上げから、一冊につき一錢づつの印税を取っていると噂されていた。

彼は忙^せツかちで、市内電車に乗ったり、省線電車に乗ったりして——文士は家賃の高い市内になんか住むことが出来ずに、あら方不便な郊外に住んでいたから、人力を飛ばしていなくて、一日に何軒も廻れなかった。現に、私も「赤い鳥」の編輯^{しゅう}を一年間手伝ったが、郊外は霜解けがひどくって、市内は草履や駒下駄で歩いても、一步郊外へ出る時には足駄^{あしだ}を用意して行かなければ、どうにもならなかった。その頃は、会社員の外は大抵洋服を着ていず、みんな和服だった。新聞記者も和服姿が多かった。

「中央公論」の売れ行きがどのくらいあったか知らないが、千単位ではなかったろう。十二万部以上売っていたと云う噂だった。だから、一冊に付き一錢の印税にもせよ、大した収入だったに違いない。今なら差し詰め滝田は自動車を乗り廻していたことになる。

私なども散歩の折々、ピカ／＼光った人力で風を切って飛ばしている滝田の姿を見掛けたもの